

〔目的〕成人女子の下着類の簡略化が進む中、キャミソールの着用率がスリップのそれを上回ってきていることは、前回報告した。そこで、本研究ではこれらの下着類の着装別に、発汗を中心とした温熱生理反応への影響、またそれらと着用感の主観的評価との関係を探ることを目的として検討を試みた。

〔方法〕被験者は健康な女子学生3名で、環境条件は気温22℃、相対湿度65%、気流0.1m/sに設定した人工気候室内で行った。着衣条件は、基準着衣（トレーナー、スカート、ブラジャー、ショーツ、ストッキング、靴）に下着を組み合わせたものとし、下着は以下の5条件とした：①下着なし、②スリップ、③キャミソール、④キャミソールとフレアパンティ、⑤綿シャツ、ただし、②、③、④の素材はナイロン。着用実験は、20分間安静にした後、15分間トレッドミル上で歩行運動（75m/min、傾斜10%）をし、続いて40分間安静を保った。測定項目は、耳腔内温、皮膚温、衣服内及び衣服表面上の温・湿度、局所発汗量、体重減少率、着衣質量、血圧、心拍数、主観的感覚量などである。

〔結果〕下着の着装別による皮膚温への影響は、個人差がみられるものの、いずれも綿シャツ着用時の平均皮膚温が有意に高い値を示した。運動後では、下着なしが腹部において他よりも低く、スリップが大腿で高い値を示した。体重の減少率は、下着なし<綿シャツ<キャミソール<スリップ<キャミソールとフレアパンティの順となった。衣服内の湿度は、運動後背、胸ともに綿シャツ着用時が最も高く維持され、次いでスリップとなった。衣服内の湿度の上昇は、被験者の発汗感覚とよく対応した。着心地については下着なしが低い評価を示した。